

【問題】  $d$  次 ( $d \geq 2$ ) の実正方行列  $A$  はベキ零で、 $A \neq O$  とする。線形変換  $f: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}^d$  を  $f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x}$  で定める。以下の問いに答えよ。

- (1)  $A$  の固有多項式  $p(x)$  が  $x^d$  である事を示せ。
- (2)  $A$  は対角化できない事を示せ。
- (3)  $a_n = \text{rank } A^n$  と置くと、 $d = a_0 \geq a_1 \geq \dots \geq a_d = 0$  を示せ。
- (4)  $\text{Im } f = \text{Ker } f$  のとき、数列  $\{a_n\}$  及び  $A$  の Jordan 標準形を求めよ。

(H29 千葉大学理学研究科 数学・情報)

【解答】  $f^{k-1} \neq 0, f^k = 0$  ( $k \geq 2$ ) だとする。

(1)  $A$  の任意の固有値  $\lambda$  とその固有ベクトル  $\mathbf{x} \in \mathbb{C}^d$  について  $A^k \mathbf{x} = \lambda^k \mathbf{x} = \mathbf{0}$  より  $\lambda^k = 0$ 、従って  $\lambda = 0$  となり、これより  $p(t) = t^d$  となる。

(2)  $A$  が対角化可能だとすると  $P^{-1}AP = \text{diag}(0, \dots, 0)$  となる  $d$  次正則行列  $P$  が存在するが、 $A = P \text{diag}(0, \dots, 0) P^{-1} = O$  となり  $A \neq O$  に反する。故に  $A$  は対角化できない。

(3)  $\text{Im } f^l \supset \text{Im } f^{l+1}$  より  $a_l = \dim \text{Im } f^l \geq \dim \text{Im } f^{l+1} = a_{l+1}$  である。今、 $\text{Im } f^l = \text{Im } f^{l+1}$  となる  $l < k$  が存在したとする。任意の  $m \in \mathbb{Z}_{>0}$  及び  $\mathbf{x} \in \text{Im } f^{l+m}$  に対し  $\mathbf{x} = f^{l+m}\mathbf{y}$  となる  $\mathbf{y} \in \mathbb{R}^d$  が存在。さらに  $f^{l+1}\mathbf{y} = f^l\mathbf{z}$  となる  $\mathbf{z} \in \mathbb{R}^d$  が存在。このとき

$$\mathbf{x} = f^{m-1}f^{l+1}\mathbf{y} = f^{m-1}f^l\mathbf{z} = f^{l+m-1}\mathbf{z} \in \text{Im } f^{l+m-1}, \quad \therefore \text{Im } f^{l+m-1} = \text{Im } f^{l+m}.$$

この操作を繰り返せば  $\text{Im } f^{l+m} = \text{Im } f^l$  となるが、これは  $f$  がベキ零である事に反する。故に  $0 \leq l < k$  となる任意の  $l$  について  $\text{Im } f^l \supsetneq \text{Im } f^{l+1}$ 、よって  $a_l > a_{l+1}$  となる。特にこれから  $k \leq d$ 、従って  $a_d = 0$  となる。

(3) 次元公式と仮定より  $d = \text{rank } f + \dim \text{Ker } f = 2 \text{rank } f$ 、 $\text{rank } f = d/2$ 。再び仮定より  $f^2 = 0$  だから  $a_0 = d$ 、 $a_1 = d/2$ 、 $a_i = 0$  ( $i \geq 2$ ) となる。 $A$  はベキ零行列だから、 $A$  の Jordan 標準形はベキ零 Jordan 細胞 (= 固有値が 0 の Jordan 細胞) の直和となる。更に

$$(\text{直和に現れる } l \text{ 次 Jordan 細胞の個数}) = \begin{cases} a_0 - 2a_1 + a_2 = d - 2(d/2) + 0 = 0, & (l = 1) \\ a_1 - 2a_2 + a_3 = d/2 - 2 \cdot 0 + 0 = d/2, & (l = 2) \\ 0 & (l \geq 3) \end{cases}$$

だから、 $A$  の Jordan 標準形は 2 次ベキ零 Jordan 細胞の  $d/2$  個の直和となる。 □

【問題】  $M_n(\mathbb{C})$  を  $n$  次複素正方形行列全体とする。  $A \in M_n(\mathbb{C})$  に対し線形変換  $\theta_A : M_n(\mathbb{C}) \rightarrow M_n(\mathbb{C})$  を  $\theta_A(X) = AXA$  と定める。また  $J_d$  を固有値 0 の  $d$  次 Jordan 細胞とする。

- (1)  $A = J_2$  及び  $A = J_3$  の場合に  $\theta_A(X) = A$  となる  $X$  をそれぞれ一つずつ求めよ。
- (2)  $J = J_3 \in M_3(\mathbb{C})$  とする。
  - (a)  $\text{Ker } \theta_J, \text{Ker}(\theta_J)^2, \text{Ker}(\theta_J)^3$  の次元を求めよ。
  - (b)  $\theta_J$  の最小多項式  $\psi(t)$  及び固有多項式  $\phi(t)$  を求めよ。
  - (c)  $\theta_J$  の Jordan 標準形はどんな行列かを答えよ。
- (3) 任意の  $A \in M_3(\mathbb{C})$  に対し  $\theta_A(X) = A$  となる  $X$  が存在する事を示せ。

(H28 千葉大学理学研究科 数学・情報)

【解答】 (1)  $X = [x_{ij}]$  とする。  $\theta_{J_2}(X) = \begin{bmatrix} 0 & x_{21} \\ 0 & 0 \end{bmatrix}$  より、例えば  $X = \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ 1 & 0 \end{bmatrix}$  とすれば  $\theta_{J_2}(X) = J_2$  となる。また  $\theta_{J_3}(X) = \begin{bmatrix} 0 & x_{21} & x_{22} \\ 0 & x_{31} & x_{32} \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$  より、例えば  $X = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix}$  とすれば  $\theta_{J_3}(X) = J_3$  となる。

(2) (a)  $X = [x_{ij}]$  に対し (1) の計算より  $X \in \text{Ker } \theta_J \Leftrightarrow x_{21} = x_{22} = x_{31} = x_{32} = 0$  より  $\dim \text{Ker } \theta_J = 9 - 4 = 5$ 。

$\theta_J^2(X) = \begin{bmatrix} 0 & 0 & x_{31} \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$  より  $X \in \text{Ker } \theta_J^2 \Leftrightarrow x_{31} = 0$ 。従って  $\dim \text{Ker } \theta_J^2 = 9 - 1 = 8$ 。

$\theta_J^3(X) = O$  より  $\dim \text{Ker } \theta_J^3 = 9$ 。

(b) (a) の計算より  $\theta_J^2 \neq O, \theta_J^3 = O$  だから  $\psi(t) = t^3$ 。Cayley-Hamilton の定理より  $t^3 \mid \phi(t)$ 。  $\phi(t)$  は次数 3 の単多項式だから  $\phi(t) = t^3$  となる。

(c) (b) の結果より  $\theta_J$  の固有値は 0 のみだから、  $\theta_J$  の Jordan 標準形に現れる Jordan 細胞は  $J_d$  という形の細胞のみ。また標準形に現れる  $d$  次 Jordan 細胞の個数は  $m_d = \text{rank } \theta_J^{d-1} - 2 \text{rank } \theta_J^d + \text{rank } \theta_J^{d+1}$  で与えられる。(a) の計算より

$$m_1 = \text{rank } \theta_J^0 - 2 \text{rank } \theta_J^1 + \text{rank } \theta_J^2 = 9 - 2 \cdot 4 + 1 = 2,$$

$$m_2 = \text{rank } \theta_J^1 - 2 \text{rank } \theta_J^2 + \text{rank } \theta_J^3 = 4 - 2 \cdot 1 + 0 = 2,$$

$$m_3 = \text{rank } \theta_J^2 - 2 \text{rank } \theta_J^3 + \text{rank } \theta_J^4 = 1 - 2 \cdot 0 + 0 = 1$$

となるから  $\theta_J$  の Jordan 標準形は  $J_3 \oplus J_2 \oplus J_2 \oplus J_1 \oplus J_1$  となる。

(3) 先ず  $A$  が Jordan 行列である場合を考える。

(a)  $A = \text{diag}(\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3)$  (対角行列) のとき、  $X = \text{diag}(x_1, x_2, x_3)$  と置けば  $AXA = \text{diag}(\alpha_1^2 x_1, \alpha_2^2 x_2, \alpha_3^2 x_3)$  より  $\alpha_i \neq 0$  ならば  $x_i = \alpha_i^{-1}$ 、  $\alpha_i = 0$  のとき、  $x_i = 0$  と置けば  $\theta_A(X) = A$  となる。

(b)  $A = (\alpha_1 E_2 + J_2) \oplus \alpha_2$  のとき、

$$\theta_A(X) = \begin{bmatrix} \alpha_1(\alpha_1 x_{11} + x_{21}) & \alpha_1^2 x_{12} + \alpha_1(x_{11} + x_{22}) + x_{21} & \alpha_2(\alpha_1 x_{13} + x_{23}) \\ \alpha_1^2 x_{21} & \alpha_1 x_{21} + \alpha_1^2 x_{22} & \alpha_1 \alpha_2 x_{23} \\ \alpha_1 \alpha_2 x_{31} & \alpha_1 x_{31} + \alpha_1 \alpha_2 x_{32} & \alpha_2^2 x_{33} \end{bmatrix} \quad (*)$$

となる。

(i)  $\alpha_1 \alpha_2 \neq 0$  のとき、 (\*) より  $X = \begin{bmatrix} \alpha_1^{-1} & -\alpha_1^{-2} & 0 \\ 0 & \alpha_1^{-1} & 0 \\ 0 & 0 & \alpha_2^{-1} \end{bmatrix}$  とすれば  $\theta_A(X) = A$  となる事が分かる。

(ii)  $\alpha_1 = 0, \alpha_2 \neq 0$  のとき、 (1) より  $X = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \alpha_2^{-1} \end{bmatrix}$  とすれば  $\theta_A(X) = A$  となる。

(iii)  $\alpha_1 \neq 0, \alpha_2 = 0$  のとき、 (\*) より  $X = \begin{bmatrix} \alpha_1^{-1} & -\alpha_1^{-2} & 0 \\ 0 & \alpha_1^{-1} & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$  とすれば  $\theta_A(X) = A$  となる。

(iv)  $\alpha_1 = \alpha_2 = 0$  のとき、 (1) より  $X = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$  とすれば  $\theta_A(X) = A$  となる。

(c)  $A = (\alpha E_3 + J_3)$  のとき,

$$\theta_A(X) = \begin{bmatrix} \alpha^2 x_{11} + \alpha x_{21} & \alpha^2 x_{12} + \alpha(x_{11} + x_{22}) + x_{21} & \alpha^2 x_{13} + \alpha(x_{12} + x_{23}) + x_{22} \\ \alpha^2 x_{21} + \alpha x_{31} & \alpha^2 x_{22} + \alpha(x_{21} + x_{32}) + x_{31} & \alpha^2 x_{23} + \alpha(x_{22} + x_{33}) + x_{32} \\ \alpha^2 x_{31} & \alpha x_{31} + \alpha^2 x_{32} & \alpha x_{32} + \alpha^2 x_{33} \end{bmatrix} \quad (**)$$

となる.

(i)  $\alpha \neq 0$  のとき, (\*\*) より  $X = \begin{bmatrix} \alpha^{-1} & -\alpha^{-2} & \alpha^{-3} \\ 0 & \alpha^{-1} & -\alpha^{-2} \\ 0 & 0 & \alpha^{-1} \end{bmatrix}$  とすれば  $\theta_A(X) = A$  となる事が分かる.

(ii)  $\alpha = 0$  のとき, (1) より  $X = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{bmatrix}$  とすれば  $\theta_A(X) = A$  となる.

以上の考察より  $A$  が Jordan 行列の場合には  $\theta_A(X) = A$  となる  $X$  の存在が示された. 一般の  $A$  に対し, その Jordan 標準形を  $J_A$  とし,  $P^{-1}AP = J_A$  となる 3 次正則行列  $P$  をとる. 上述より  $\theta_{J_A}(X) = J_A$  となる  $X$  が存在し,

$$A = PJ_AP^{-1} = PJ_A X J_A P^{-1} = (PJ_A P^{-1})(PXP^{-1})(PJ_A P^{-1}) = A(PXP^{-1})A,$$

従って  $\theta_A(PXP^{-1}) = A$  となるから, 一般の  $A$  についても  $\theta_A(X) = A$  となる  $X$  の存在が示された. □

【問題】  $A$  を実数を成分とする 4 次正方行列,  $f$  を  $\mathbb{R}^4$  の線形変換で  $f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x}$  で定義されるものとする.  $f^2 = f \circ f$  を合成変換とするとき,  $\text{Ker } f \neq \text{Ker } f^2$  が成り立つと仮定する.

- (1)  $f$  が単射でないことを示せ.
- (2)  $\text{rank } A^2 \leq 2$  を示せ.
- (3)  $A$  は対角化できないことを示せ.
- (4) さらにある 1 次独立なベクトル  $\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c} \in \mathbb{R}^4$  に対して

$$f(\mathbf{a}) - f(\mathbf{b}) = \mathbf{a} - \mathbf{b}, \quad f(\mathbf{b}) - f(\mathbf{c}) = \mathbf{b} - \mathbf{c}$$

が成り立つと仮定する. このとき  $A$  の固有多項式と Jordan 標準形を求めよ.

(H26 千葉大学理学研究科 数学・情報)

【解答】 (1) 一般に  $\text{Ker } f \subset \text{Ker } f^2$  であり,  $\text{Ker } f \neq \text{Ker } f^2$  より  $f^2(\mathbf{x}) = \mathbf{0}$ ,  $f(\mathbf{x}) \neq \mathbf{0}$  となる  $\mathbf{x} \in V$  が存在する.  $f(f(\mathbf{x})) = \mathbf{0}$  より  $f(\mathbf{x}) \in \text{Ker } f$ , 故に  $\text{Ker } f \neq \{\mathbf{0}\}$  である.

(2) (1) より  $\text{Ker } f \neq \{\mathbf{0}\}$ ,  $\dim \text{Ker } f \geq 1$ . 一般に  $\text{Ker } f \subset \text{Ker } f^2$  と仮定  $\text{Ker } f \neq \text{Ker } f^2$  より  $\dim \text{Ker } f < \dim \text{Ker } f^2$  だから  $2 \leq \dim \text{Ker } f^2$ . 次元公式より

$$\text{rank } A^2 = \dim \text{Im } f^2 = \dim \mathbb{R}^4 - \dim \text{Ker } f^2 \leq 4 - 2 = 2.$$

(3)  $A$  が対角化可能だとすると固有ベクトルから成る基底  $\{\mathbf{p}_1, \dots, \mathbf{p}_4\}$  ( $f(\mathbf{p}_i) = \lambda_i \mathbf{p}_i$ ) がとれる. 必要ならば添字を変更して  $\lambda_j = 0$  ( $j \leq i$ ),  $\lambda_j \neq 0$  ( $i < j$ ) だとする.

仮定より  $\mathbf{v} \in \text{Ker } f^2 - \text{Ker } f$  がとれ, これを  $\mathbf{v} = \sum_{j=1}^4 a_j \mathbf{p}_j$  とすれば

$$f(\mathbf{v}) = \sum_{j=1}^4 a_j \lambda_j \mathbf{p}_j \neq \mathbf{0}, \quad f^2(\mathbf{v}) = \sum_{j=1}^4 a_j \lambda_j^2 \mathbf{p}_j = \mathbf{0}$$

が成立. 後より  $a_j \lambda_j^2 = 0$  だから  $a_j = 0$  ( $i < j$ ), 従って  $\mathbf{v} = \sum_{j \leq i} a_j \mathbf{p}_j$  と表されるが,  $\lambda_j = 0$  ( $j \leq i$ ) より  $f(\mathbf{v}) = \mathbf{0}$  となり矛盾を生ずる. 故に  $A$  は対角化できない.

(4)  $\text{Ker } f \subsetneq \text{Ker } f^2$  より  $f(\mathbf{p}_2) \neq \mathbf{0}$ ,  $f^2(\mathbf{p}_2) = \mathbf{0}$  となる  $\mathbf{p}_2 \in \mathbb{R}^4$  が存在する. ここで  $\mathbf{p}_1 = f(\mathbf{p}_2)$  と置く. 更に  $\mathbf{p}_3 = \mathbf{a} - \mathbf{b}$ ,  $\mathbf{p}_4 = \mathbf{b} - \mathbf{c}$  と置く. 仮定より  $\mathbf{p}_3, \mathbf{p}_4$  は固有値 1 に対する  $A$  の固有ベクトルである. ここで  $a_1 \mathbf{p}_1 + a_2 \mathbf{p}_2 + a_3 \mathbf{p}_3 + a_4 \mathbf{p}_4 = \mathbf{0}$  だとする. この両辺に左から  $A^2$  を掛ければ

$$\begin{aligned} a_1 A \mathbf{p}_1 + a_2 A \mathbf{p}_2 + a_3 A \mathbf{p}_3 + a_4 A \mathbf{p}_4 &= a_1 \mathbf{p}_1 + a_3 \mathbf{p}_3 + a_4 \mathbf{p}_4 = \mathbf{0}, \\ a_1 A^2 \mathbf{p}_1 + a_2 A^2 \mathbf{p}_2 + a_3 A^2 \mathbf{p}_3 + a_4 A^2 \mathbf{p}_4 &= a_3 \mathbf{p}_3 + a_4 \mathbf{p}_4 = a_3 \mathbf{a} + (a_4 - a_3) \mathbf{b} - a_4 \mathbf{c} = \mathbf{0} \end{aligned}$$

後者と  $\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}$  の一次独立性より  $a_3 = a_4 = 0$ . また  $a_1 \mathbf{p}_1 = \mathbf{0}$ ,  $\mathbf{p}_1 = f(\mathbf{p}_2) \neq \mathbf{0}$  より  $a_1 = 0$ . さらに  $a_2 \mathbf{p}_2 = \mathbf{0}$ ,  $\mathbf{p}_2 \neq \mathbf{0}$  より  $a_2 = 0$ . よって  $\mathbf{p}_1, \dots, \mathbf{p}_4$  は一次独立である. そこで  $P = [\mathbf{p}_1, \dots, \mathbf{p}_4]$  とすれば  $P$  は正則となる. このとき

$$AP = [\mathbf{0}, \mathbf{p}_1, \mathbf{p}_3, \mathbf{p}_4] = [\mathbf{p}_1, \mathbf{p}_2, \mathbf{p}_3, \mathbf{p}_4] \begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$$

より  $A$  の Jordan 標準形は  $\begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ . また固有多項式  $\varphi_A(t) = |tE_4 - A|$  は

$$\varphi_A(t) = |tE_4 - P^{-1}AP| = \begin{vmatrix} t & -1 & 0 & 0 \\ 0 & t & 0 & 0 \\ 0 & 0 & t-1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & t-1 \end{vmatrix} = \frac{t^2(t-1)^2}{1}$$

□

【問題】  $x, y, z$  を変数  $t$  の関数として、ベクトル  $X = X(t) = \begin{pmatrix} x(t) \\ y(t) \\ z(t) \end{pmatrix}$  に対し  $\frac{dX}{dt} = \begin{pmatrix} dx/dt \\ dy/dt \\ dz/dt \end{pmatrix}$  とおく。このとき微分方程式

$$\frac{dX}{dt} = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 3 & 2 & 1 \\ 0 & 0 & 2/t \end{pmatrix} X$$

を解け。

(H23 千葉大学理学研究科 数学・情報)

【解答】 簡便の為、 $t$  に関する微分を  $\cdot$  により表す。 $z$  は  $\dot{z} = (2/t)z$ 、即ち  $t\dot{z} = 2z$  を満たす。 $t = e^s$  と置換すれば

$$\frac{d}{ds} = \frac{dt}{ds} \frac{d}{dt} = e^s \frac{d}{dt} = t \frac{d}{dt}$$

より  $z$  は  $dz/ds = 2z$  を満たす。従って  $z = C_3 e^{2s} = C_3 e^{2 \log t} = \underline{C_3 t^2}$  ( $C_3$  は任意定数) となる。これを代入すれば方程式の第 1, 2 成分は  $x, y$  は連立方程式

$$\dot{\mathbf{x}} = A\mathbf{x} + \mathbf{b} \quad \left( \mathbf{x} = \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix}, \quad A = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 3 & 2 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{b} = \begin{bmatrix} 0 \\ C_3 t^2 \end{bmatrix} \right)$$

を満たす。係数行列  $A$  は

$$P^{-1}AP = \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & -1 \end{bmatrix} \quad P = \begin{bmatrix} 1 & -1 \\ 3 & 1 \end{bmatrix} \quad \left( P^{-1} = \frac{1}{4} \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ -3 & 1 \end{bmatrix} \right)$$

と対角化されるから、 $\mathbf{y} = P^{-1}\mathbf{x} = {}^t[u, v]$  とすれば  $u, v$  は

$$\begin{bmatrix} \dot{u} \\ \dot{v} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & -1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u \\ v \end{bmatrix} + \frac{C_3}{4} \begin{bmatrix} t^2 \\ t^2 \end{bmatrix}$$

を満たす。一般に 1 階線形常微分方程式  $\dot{x} = \alpha x + f(t)$  の一般解は

$$x = e^{\alpha t} \left( \int e^{-\alpha t} f(t) dt + C \right) \quad (C \text{ は任意定数})$$

により与えられる。また部分積分より  $\int t^2 e^{-\alpha t} dt = -\left(\frac{t^2}{\alpha} + \frac{2t}{\alpha^2} + \frac{2}{\alpha^3}\right) e^{-\alpha t}$  だから、上の  $u, v$  は

$$\begin{cases} u = C_1 e^{3t} - \frac{C_3}{4 \cdot 27} (9t^2 + 6t + 2) \\ v = C_2 e^{-t} + \frac{C_3}{4} (t^2 - 2t + 2) \end{cases} \quad (C_1, C_2 \text{ は任意定数})$$

となる。 $x = u - v$ 、 $y = 3u + v$  より  $x, y$  は次で与えられる：

$$\begin{cases} x = C_1 e^{3t} - C_2 e^{-t} + \frac{C_3}{27} (9t^2 - 12t + 14) \\ y = 3C_1 e^{3t} + C_2 e^{-t} - \frac{2C_3}{9} (3t - 2) \end{cases} \quad (C_1, C_2 \text{ は任意定数})$$

□

〈雑感〉 “線形” 常微分方程式なので線形代数の問題として扱う。

【問題】 多項式  $p$  に対して,

$$(Tp)(x) = (x+1)p(x+1) - xp(x)$$

と定める.

- (1)  $n$  次以下の複素数係数多項式全体の集合を  $V_n$  とすると,  $V_n$  は通常の和とスカラー倍とでベクトル空間となる. 上で定めた対応  $p \mapsto Tp$  は  $V_n$  の線形変換となることを示せ.  
 (2)  $n = 4$  の場合を考える.  $V_4$  の適当な基底を選んで, 線形変換  $T: V_4 \rightarrow V_4$  を対角行列で表現せよ.

(H11 千葉大学理学研究科 数学・情報)

【解答】 (1)  $p_1, p_2 \in V_n, \alpha, \beta \in \mathbb{C}$  とすると

$$\begin{aligned} T(\alpha p_1 + \beta p_2)(x) &= (x+1)(\alpha p_1 + \beta p_2)(x+1) - x(\alpha p_1 + \beta p_2)(x) \\ &= \alpha(x+1)p_1(x+1) + \beta(x+1)p_2(x+1) - \alpha xp_1(x) - \beta xp_2(x) \\ &= \alpha(x+1)p_1(x+1) - \alpha xp_1(x) + \beta(x+1)p_2(x+1) - \beta xp_2(x) = \alpha(Tp_1)(x) + \beta(Tp_2)(x) \end{aligned}$$

より  $T$  は  $V_n$  上の線形変換である.

(2)  $V_4$  の基底  $\{1, x, x^2, x^3, x^4\}$  について

$$\begin{aligned} T1 &= (x+1) - x = 1, & Tx &= (x+1)^2 - x^2 = 2x+1, & Tx^2 &= (x+1)^3 - x^3 = 3x^2 + 3x+1, \\ Tx^3 &= (x+1)^4 - x^4 = 4x^3 + 6x^2 + 4x+1, & Tx^4 &= (x+1)^5 - x^5 = 5x^4 + 10x^3 + 10x^2 + 5x+1 \end{aligned}$$

だから, この基底に関する表現行列を  $A$  とすれば

$$T(1, x, x^2, x^3, x^4) = (T(1), T(x), T(x^2), T(x^3), T(x^4)) = (1, x, x^2, x^3, x^4) \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 0 & 0 & 3 & 6 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 4 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 5 \end{bmatrix} = (1, x, x^2, x^3, x^4)A$$

となる. その形より  $A$  の固有値は  $\lambda = 1, 2, 3, 4, 5$  であり,  $A - \lambda E_n$  をそれぞれ簡約化すれば

$$\begin{aligned} A - E_5 &= \begin{bmatrix} 1-1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 2-1 & 3 & 4 & 5 \\ 0 & 0 & 3-1 & 6 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 4-1 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 5-1 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \\ A - 2E_5 &= \begin{bmatrix} 1-2 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 2-2 & 3 & 4 & 5 \\ 0 & 0 & 3-2 & 6 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 4-2 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 5-2 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & -1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \\ A - 3E_5 &= \begin{bmatrix} 1-3 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 2-3 & 3 & 4 & 5 \\ 0 & 0 & 3-3 & 6 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 4-3 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 5-3 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & 0 & -2 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & -3 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \\ A - 4E_5 &= \begin{bmatrix} 1-4 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 2-4 & 3 & 4 & 5 \\ 0 & 0 & 3-4 & 6 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 4-4 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 5-4 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & -6 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & -11 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & -6 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \\ A - 5E_5 &= \begin{bmatrix} 1-5 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 2-5 & 3 & 4 & 5 \\ 0 & 0 & 3-5 & 6 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 4-5 & 10 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 5-5 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & -24 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & -50 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & -35 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & -10 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

となるから,

$$p_1(x) = 1, \quad p_2(x) = 1+x, \quad p_3(x) = 2+3x+x^2, \quad p_4(x) = 6+11x+6x^2+x^3, \quad p_5(x) = 24+50x+35x^2+10x^3+x^4$$

とすれば, 最高次を比較する事で  $\{p_1(x), p_2(x), p_3(x), p_4(x), p_5(x)\}$  は  $V_4$  の基底であり,  $(Tp_i)(x) = ip_i(x)$  ( $i = 1, 2, 3, 4, 5$ ) が成

立する. 従ってこの基底に関する表現行列は  $\begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 3 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 4 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 5 \end{bmatrix}$  となる. □